事実と抽象
——コゼブスキの言語理論について——

大志万一徳

I

1966年3月の *ETC.: A Review of General Semantics*（一般意味論協会の機関誌，季刊）誌上で．一般意味論（General Semantics）におけるアルフレッド・コゼブスキ（Alfred Korzybski）の立場について，デエイヴィド・バーランド二世（David Bourland, Jr.）とアナトール・ラポポート（Anatol Rapoport）との間に，一つの論争が行われた．事の起りは，1964年12月の *ETC.* 誌上で，ラポポードがハヤカワ（S. I. Hayakawa）のエッセイ集「記号，地位，個性」（*Symbol, Status, and Personality*）を批評し，一般意味論の過去について述べたことに始まる．

コゼブスキ（1879—1950）はポーランドに生まれ，後米国に帰化した．彼ははじめ技師としての教育を受けたが，後一般意味論を創始した．ハヤカワはコゼブスキが創設した一般意味論研究所（The Institute of General Semantics）における演習に参加し，コゼブスキの指導を受けた．1943年 *ETC.* を創刊し，今日までその編集に当っている．現在サンフランシスコ州立大学（San Francisco State College）の教授（Professor of English）として，一般意味論（Introduction to General Semantics）と伝達の諸問題（Problems of Communication）とを講じている．コゼブスキとその弟子ハヤカワとの間には，意味論に関する本質的な見解の相違はなく，ハヤカワはコゼブスキの理論を芸術，詩，広告，社会的行為，人種問題等のより広い主題に応用している．コゼブスキの理論に大きな影響を受けたラポポートは，ミシガン大学（University of Michigan）の数理生物学教授（Professor of Mathematical Biology）であるが，一般意味論の分野では，*ETC.* の準編集主幹（Associate Editor）としてハヤカワを助けている．コゼブスキの理論の背後には，数学

や生物学の知識があるが，ラポポートはこれらの学問を専門としている．バーランド二世は，次に述べるように，コゼブスキからかなりの期間にわたって親しく教えを受けた．現在カリフォルニア州サンディエゴ（San Diego）に住んでいる．

ラポポートはハヤカワのエッセイ集「記号，地位，個性」の批評の中で，コゼブスキの神経学，神経生理学，心理学，数学等についての知識は，これらの学問の発展に直接役立つものだったかどうかは疑わしいとしても，少くともすべての分野において，正統派をついでいたことが今日認められていると述べている．しかしながら，ラポポートはコゼブスキの欠点として，「コゼブスキ自身が外延的適応（Extensional orientation）に欠けていた」と述べている．すなわち，コゼブスキ自身自分の説く理論を身につけていなかったと言うのである．その結果，コゼブスキは近ずきたいと思う人に近づけなかった．コゼブスキが近づくことを望んだのは，科学者とより賢明な生活を望む一般の人たちだった．そして「コゼブスキと科学者との間の障害は，コゼブスキが科学者のエチケットに欠けていたところから生れた．科学の世界では，専門的な知識と専門家に語る時の自信との間の調和が，エチケットとして大へん重視されるからである．他方コゼブスキと一般の人々との間の障害は，彼が帰化した国とその国民を知らなかったことから起った」とラポポートは論述している．

これに対して，バーランド二世は前述の季刊誌に次のような批評をした．(1) まずラポポートの書き出しからしてなっていない．「かつてコゼブスキという名の思想家がいた」とは，一般意味論の本尊に対して失礼千万ではないか．(2) コゼブスキの欠点として，ラポポートはコゼブスキ自身が外延的適応を身につけていなかったと言っているが，この重大な主張の根拠を示してもらいたいものである．ラポポートはコゼブスキの演習には一度も出たことがないし，自分が論文を読んだ二つの意味論大会では，コゼブスキに会ったかも知れないが，いずれにせよラポポートとコゼブスキとの交際は極めて皮相なものである．しかるに「自分は」とバーランド二世はつけ加える「1947年から1950年の間に5回演習に出席し，更に1949年から50年にかけて1年間，コゼブスキ奨学金を得て一般意味論研究所で研究した」．(3) コゼブスキが時に学界の欺瞞をあばこうとしたことは事実である．またその人の好意を得たら大いに助かったであろうような人を疎外しようとさえした．しかしコゼ

ブスキが「科学者のエチケットに欠けていた」と言うのは言い過ぎである．(4) コゼブスキは学界で十分認められなかったと言うが，これは主として彼が演習を通して個人的な指導をしたためである．彼に反対する勢力を考えてもみるがよい．コゼブスキは有名な宗教，精神病学，哲学者をはっきりと敵にまわしたのである．しかし1966年までに彼の業績は十分に認められ，米国の有名な大学で一般意味論のコースを持たないか，他のコースの一部としてこの分野の読書が要求されないような大学はほとんどないのである．(5) コゼブスキは米国と米国民のことをよく知らなかったと言うが，このことは当っていないと思う．コゼブスキはその暖かさと世俗的なユーモアでもって，いろいろな背景を持った学生との間に，すばやく親密な関係をつくり出した．ラポポートは，コゼブスキが個人に対して，人間を人間全体として符ちょうをもって反応したのではなくて，独特の個性を持った一人の人間としてそれぞれに反応したことを見逃している．

ラポポートは，同じ *ETC.* 誌上で，バーランド二世の批評に対して次のような反論を述べている．コゼブスキ自身が外延的適応が出来ていなかったと言うのは，自分自身のコゼブスキとの接触の経験から出ている．すなわち，自分はコゼブスキが横柄で自負心の強い老人だったという不愉快な印象を持っている．彼が自分に尋ねた最初の，そして唯一の質問は，「君は『科学と正気』を何回読んだかね」という失礼なものであった．（筆者註．「科学と正気」，*Science and Sanity*, はコゼブスキの主著で，1933年初版）そして重要なことは，自分はコゼブスキのすぐれた理論と個人的な欠点とをはっきり区別して考えているということである．ハヤカワの「記号，地位，個性」についての書評の要旨は，コゼブスキが科学者に対しても，一般の人々に対しても，自分の思っていることをうまく伝達出来なかったということである．ここで問題にしている意志の伝達とは，個人的に深い接触を持つもの同志のそれではなくて，コゼブスキとその正しく素直な読者との間の意志の伝達である．コゼブスキの科学者に対する語りかけに自信過剰なところがあり，一般の読者にはむずかしすぎる表現が多いことは，冷静な眼をもって，虚心坦懐に「科学と正気」を読んでみれば，すぐわかるところである．

以上述べたところから明らかなことは，ラポポートがコゼブスキの個人的な欠点や意志伝達のまずさを指摘しながら，コゼブスキの重要にして独創的な理論を正し

く評価しようとしているのに対して，バーランド二世は無批判にコゼブスキを擁護し，感情的で的はずれな批評をしているということである．バーランド二世のこのような盲目的追随は，コゼブスキの理論の価値を高めるよりは，むしろそれを低くするものであると言わねばならない．

II

それでは，この論争のもとになったコゼブスキの言語理論はどのようなものであろうか．「人間とは何か」――これは古くてしかも常に新らしい問題であるが――の質問に答えることが，コゼブスキの理論の出発点であった．「人間の成年」(*Manhood of Humanity*, 1921年初版）において，コゼブスキは彼以前の（そして今日においてもなおしばしば見られる）人間観は，次の二つのいずれかだとした．(1) 人間を一種の動物と見るもの．(2) 人間を動物と何か超自然的なものとの結合と見るもの．有史以前の30万年から50万年にも及ぶ長い「人間の子供時代」において，人間の幸福を阻害してきた最も大きな原因は，このように，人間が自分自身を知らなかったことであった．彼等は「人間とは何か」に対する正しい答を知らなかったために，文明の進歩を妨げてきた．人間と動物の間の基本的な次元の相違を知らずに，両者を混同してしまったのである．

これに対して，コゼブスキは生物を次のように三つの部類に分ける．植物は太陽エネルギーを化学エネルギーに変える機能を持っているから，これを化学結合類(chemistry-binding class）と名づける．動物は植物の持たないエネルギー，すなわち空間を自由に動きまわる能力を持っているから，これを空間結合類(space-binding class）と定義する．そして，人間は化学結合，空間結合の能力の外に，過去の知識と経験を要約し，消化し，自分のものとし，現在の発展に使う能力を持っている．人間は未来のために，過去を現在に生かす力を持っている．従って人間を時間結合類（time-binding class）と定義する．

人間と動物の間のこの基本的な相違を，コゼブスキは水平的相違（horizontal difference）と呼んでいる．動物の抽象作用がどこかで止るのに対して，人間のそれは無限だからである．換言すれば，動物が言語による抽象的能力を持たないのに対して，人間は言語によって無限に抽象出来るからである．人間と動物を峻別する時

間結合の能力は，人間特有の抽象的能力によって，はじめて可能となるのである．抽象作用が「科学と正気」の――ひいては，結局，一般意味論の――中心思想であるから，この点についてコゼブスキの考え方を考察していきたい．

III

時間結合の概念から出発したコゼブスキの抽象作用の理論は，アリストテレス的原理の否定へと発展していった．従ってまず簡単に三つのアリストテレス的原理を述べておかねばならない．

第1の――そして三つの原理の中で最も基本的な――原理は，同一律(The Law of Identity) である．これは通常「AはAである」という形であらわされる．例えば「人間は人間である」,「真理は真理である」というようにである．コゼブスキがこの原理を否定するのは，この世界には絶対的な同一ということはないからである．実在の事物は絶えず流動する過程である．従って同一律は事実に反する結果にならざるを得ない．第2の原理は矛盾律 (The Law of Contradiction) である．「Aは非Aでない」．または「AがBであるとともに非Bであることは出来ない」という形で表現される．「これは真理であって真理ではないということはあり得ない」というのがこの原理の一例である．同一律「AはAである」を換言すれば，「Aは非Aでない」となるから，同一律と矛盾律とは同じ原理を肯定形式と否定形式とで表現したものと考えることが出来る．第3の原理は排中律 (The Law of Excluded Middle) で，「AはBであるか非Bであるかのいずれかである」とされる．この原理はいかなる中間をも認めないのである．例えば，「これは真理であるか真理でないかのいずれかである」というが如きものである．

これら三つのアリストテレス的原理は，一つの根本的な誤りを犯している．それは人間の抽象作用を無視しているということである．一般的にいって，抽象作用とは，選択すること，識別すること，摘要すること，推論すること，除去すること，省略すること，遊離させることを意味する．コゼブスキは一般的な抽象作用を更に突込んで考察し，次のように5段階に大別した．

The first represents the un-speakable event, or the scientific object, or unseen physico-chemical process on the sub-microscopic levels which constitute stimuli

registered by our nervous system as objects. The second consists of the external, objective, also un-speakable, levels on which we see with our eyes,. On this level, we could make a moving picture, including actions,.... The third level represents the equally un-speakable psycho-logical 'pictures' and *s. r.* On the fourth level of abstractions we describe verbally our facts, that humans (a) eat, sleep.; (b) cheat, murder.; (c) moralize, philosophize, legislate.; (d) scientize, mathematize,.

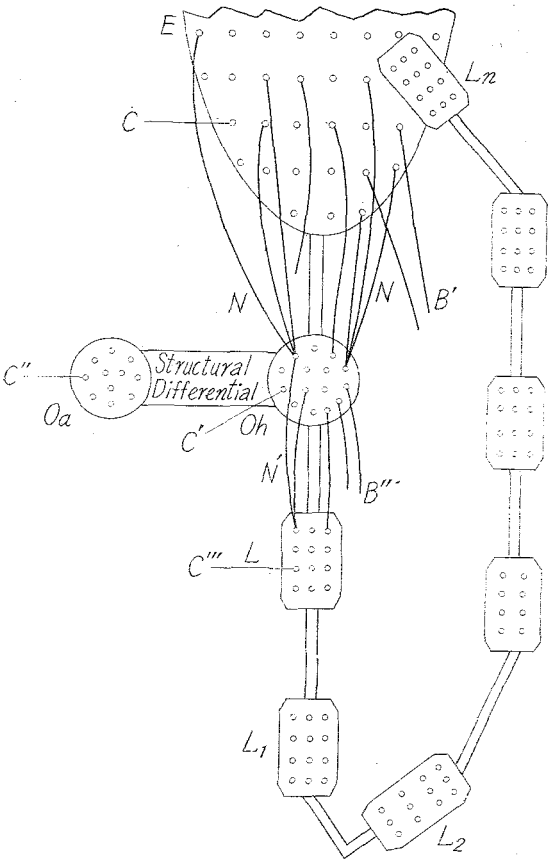
Finally, in the present context, our inferences belong to the fifth level. (*Science and Sanity*, p. 447)（筆者註. *s. r.* は semantic reactions を意味する. ,. は ,etc. を, .; は etc.; をそれぞれ表わす）これらの抽象作用の5段階は，相互に全く異なる次元に属するものである．肉眼で見える普通の事物は科学的事象とは異なり，科学的事象からの抽象である．同様に感情は普通の事物とは異なり，事物からの抽象である．描写の言語は感情とは異なり，それからの記号による抽象である．そして推論の言語は描写の言語とは異なり，それからの抽象なのである．

抽象作用をこのように詳細に見るコゼブスキが，人間特有の抽象的能力を無視するアリストテレス的原理を強く否定したのは当然である．彼は自分の理論を非アリストテレス的体系（Non-Aristotelian System）と名づけたのである．

これらの一連の抽象作用を説明するために，コゼブスキは構造の特異形態（The Structural Differential）と称する次頁の図のような巻き物を作製した．

放物線 E は科学的事象の段階を表わす．上の線が切れているのは，科学的事象の特質は無限だからである．小さい円 C は科学的事象の特質を示す．円 O_h は人間の神経系統が抽象出来る段階の事物を表示し，O_a は動物の神経系統が抽象出来る段階の事物を表示する．人間の事物と動物の事物が似ていることを，動物の円を人間の円より小さくすることによって示している．C' は人間の事物の特質で，C'' は動物の事物の特質である．円内の小さい円の配置の相違は，人間の事物と動物の事物の間の特質の相違を表わしている．いずれの場合も，特質の数は有限である．L は人間が事物について言語によって描写する段階である．C''' は描写の特質を示す．更に，人間は描写 L について，次の陳述 L_1 をすることが出来る．また新らしい陳述 L_1 についても陳述 L_2 をすることが出来，このようにして人間の抽象作

構造の特異形態（*The Structural Differential*）



用は，だんだん高い推論の段階へと無限に続いていく．そして，最後には科学的事象の段階に帰るのである．N, N' は神経系統の抽象作用の過程を示し，B', B'' は抽象されなかった特質，換言すれば，捨象された特質を表わしている．動物には科学的事象の段階はない．また動物には言語もないから，人間の L 以上の段階はなくて，普通の事物 O_a があるだけである．

構造の特異形態が示すように，事象や事物等の実在の世界と言語の世界とは全く

異なるのであるから，二つの世界を結ぶ唯一のきずなは構造的なものである．人間が抽象作用の段階の相違を無視し，異なる段階を同一視すれば，彼は頭の中だけにあり，実在の世界には全く存在しない幻想を述べているのである．これに反して，実在の世界及び人間の神経系統に似た構造の言語を使えば，そのような言語は原始的で幻想的な推測や同一化を除去することが出来るのである．コゼブスキは言語の構造がどのようなものであるべきかについて，次のように述べている．

A language, to be most useful, should be similar in its structure of the events which it is supposed to represent. The language of 'abstractions of different orders' appears to be satisfactory in point of structure. It is a *non-el* language, since it does not discriminate between 'senses' and 'mind',. It is a functional language, since it describes, by implication, what is going on in the nervous system when it reacts to stimuli. It is a language which can be made as flexible and as sharp as desired, thus making it possible to establish sharp verbal differences, of both horizontal and vertical type, between the terms 'man' and 'animal'. (*Science and Sanity*, p. 412) (筆者註. *non-el* は non-elementalistic を意味する.)

コゼブスキは，人間が科学的事象や事物，感情，経験等の実在の段階に正しく適応出来るためには，適切な構造の言語が欠くべからざるものであることを確信しているのである．

抽象作用の正しい順序と言語の適切な構造は，最も重要な事柄であるにもかかわらず，絶えず混同され間違えられる．ゴゼブスキは人間生活で最もしばしば見られる抽象作用の順序の混同として，次の三種類を挙げる．

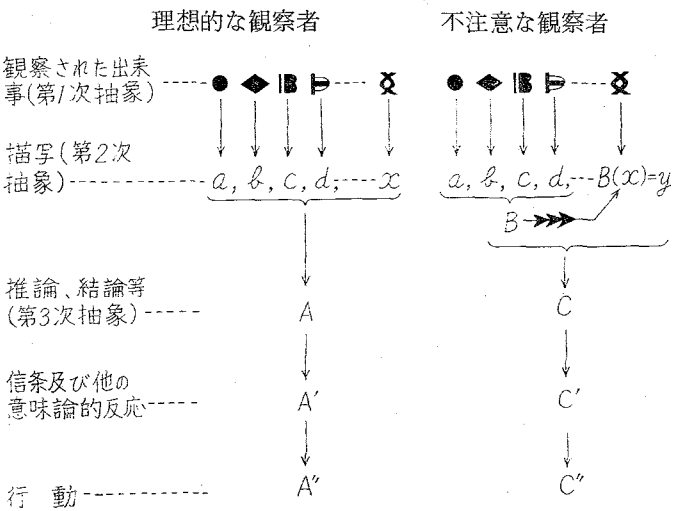
(1) 無知 (ignorance)：科学的事象の段階と普通の事物の段階とを同一視するもの．科学的見地からすれば，いかなるものも窮極的には原子，電子等からなっていて，その特質は無限であるのに対して，普通の事物の特質は有限であり，両者は全く異なる抽象作用の段階に属するのである．

(2) 対象化 (objectification)：事物や感情や経験の段階と言語の段階とを同一視するもの．重要なことは，人間が言葉で何を言おうとも，それは言葉が表わす事物や感情や経験そのものではないということである．それはあくまでも言語の段階に

属するのであって，言語では言い表わし得ない実在の世界の段階には属していないのである．例えば「豚」はある子供にとってはきたない言葉で，彼にはその言葉はきたない動物を適切に表わしているように思われる．この子供は言語の段階と事物（この場合「豚」と呼ばれる動物）の段階とを混同しているのである．しかしながら，抽象作用の順序の混同は，子供にとっては自然なことであるから，大人の例を挙げれば，先頃警察の名を使って札幌の建設会社社長を誘い出し殺害するという事件が起きた．被害者が言語の段階と事実の段階とをはっきり区別していたら，犯罪を未然に防ぐことが出来たであろう．

(3) 高い段階の抽象作用の混乱 (confusion of higher order abstractions)：描写の段階と推論の段階とを同一視するもの．コゼブスキは理想的な観察者と，不注意な観察者の二人について，抽象作用がどのように進むかを比較している．その要領はこのようである．理想的な観察者の場合は，出来事●．◆．▮，▶が起り，それから新らしい出来事▒が起った．この観察の段階では言葉は使われないから，コゼブスキは出来事を示すために，上記のような風変りな符号を使っている．それから観察者は上記の出来事を描写する．例えば $a, b, c, d, \ldots, x$ というようにである．それから彼はこの描写に基づいて推論し，A という結論に達する．彼の結論は正しく，その結果としての行動は適正であると仮定すると，ここには少くとも三つの異なった抽象作用の段階があることが明らかである．すなわち，観察され，経験された言葉では表わし得ない低い順位の抽象の段階，次に描写の段階，そして最後に推論の段階である．

他方不注意な観察者が前と同じ出来事を観察するとしよう．彼は出来事●，◆，▮，▶，…を観察し，新らしい出来事▒を観察する．出来事●，◆，▮，▶，を彼は $a, b, c, d, \ldots$ と描写するだろう．そしてその数少い描写から，彼は結論 B に到達するだろう．つまり彼はより高い順位の抽象に到達するのである．新らしい出来事▒が起ると，彼はそれをすでに到達した結論で取扱うから，新らしい出来事の描写は結論 B によって色づけられ，理想的な観察者の x ではなくて，$B(x)=y$ となる．すなわち，彼の事実の描写は理想的な観察者の $a, b, c, d, \ldots, x$ ではなくて，$a, b, c, d, \ldots, B(x)=y$ となるのである．次に彼は彼の事実 $a, b, c, d, \ldots, B(x)=y$ について，より高い段階の結論 C を下す．このようにして意味論的誤差



が生じるのである．出来事は同じであったが，抽象の段階を同一視することによって，結局全く違った結論に達し，全く違った行動をとることになったのである．これを図示すれば上のようになる．以上のことを例示するために，コゼブスキは次の例をつけ加えている．ある少年がどうしても朝起きようとしなかった．両親は無意識に抽象作用を混同し，x を $B(x)$ とした．少年は怠け者だと結論したのである．両親はこの推論を，次々と現われる事実の描写に読みこみ，両親の新らしい事実は意味論的にますますゆがめられたものとなり，事態は悪化するばかりだった．ところが精神病医が，この問題を理想的な観察者のように取扱った．結果は少年は怠け者ではなくて病気だということがわかった．適切な医療が講じられ，万事がうまくいったというのである．

大多数の人間にこの不幸が起るのは，このような抽象作用の順序の混同からである．人間が現実には複雑な人間の世界に住みながら，抽象作用の順序を混同する時，人間としての適応が出来なくなって，動物的な反応を示し，さまざまの困難に陥るのは当然である．それでは，いかにして抽象作用の順序の混同を防ぐことが出来るであろうか．コゼブスキはその解決を，人間と動物のもう一つの基本的な相違，すなわち，抽象作用の意識に求める．動物は抽象作用を意識することが出来ないが，

人間はそれが出来るから，コゼブスキはこの重要な相違を，水平的相違に対して，垂直的相違（vertical difference）と呼んでいる．抽象作用を意識することによって全面的な意味論的解決を得ることが出来るのである．コゼブスキ自身の言葉を引用すれば，

We should notice that in this maze of observational material, one general rule holds; namely, 'consciousness of abstracting' offers a *full semantic solution.* In it we find not only a complete foundation for theory of sanity, but also the semantic, psycho-physiological mechanism for the passing from the infantile, or primitive-man, level to the higher level of complete adulthood and civilized social man. (*Science and Sanity*, pp. 514–515)

である．さきに理想的な観察者の例で見たように，抽象作用の段階の同一視を除去することによって，抽象作用を意識することが出来るのである．

以上述べてきたところで明らかなように，コゼブスキの抽象作用の理論は簡単である．抽象作用の段階が相互に異なるということは，議論の余地のないところであるから，人はこれを完全に理解していると思いがちである．しかしながら，この自明さのゆえに，コゼブスキの理論の重要性が正しく認識されないことがしばしば起るのである．そして，コゼブスキは「科学と正気」において，理論を理解するだけでは十分でなくて，抽象作用を常に意識することが大切であることを繰返し説いている．抽象作用を意識することがいかに困難であるかについては，「自分はこの体系の創始者であるにもかかわらず，時々自分自身が以前の正しくない意味論的習癖に陥る」と述懐しているほどである．しかし，構造の特異形態を使用することによって，比較的容易にこの意識を習得することが出来る．例えば，実在の世界は言葉だけによっては到達されないのであるから，この世界に達するためには，人は沈黙して，構造の特異形態の事物の段階 O_a を指差さなければならない．コゼブスキは，誰かが急にしゃべりだせば，次のような無言劇をするようにすすめている．話し手が抽象作用の言語の段階 L, L_1, L_2 ..., L_n にいることを示すために手を振れ，それから実在の世界の段階を指差せ．そして，実在の世界の段階では沈黙する外ないことを示すために，他方の手で口を閉じよと．構造の特異形態という視覚化手段に訴えるのは，抽象作用の異なる段階を区別することが，言語のみによっては不可

能だからである．視覚化することによって，重要な意味論的相違を伝えることが出来，それと共に非同一を訓練することが出来るのである．

コゼブスキの理論の中核をなす抽象作用とそれを意識する方法について考察してきたのであるが，コゼブスキの理論は，彼以前の意味論に対してどのような特徴を持つのであろうか．コゼブスキの理論の一つの特徴はそれがいかにして人間の神経系統を最も効果的に働かせるべきかを説明し，訓練する新らしい方法を示したことである．従来の意味論は，言語が指示する対象物や操作上の意味等に関心を示しはしても，要するに言語による言語の定義であった．従来の意味論は人間的評価とは何の関係もなかった．人間の正気や狂気には何の関心も示さなかったのである．

コゼブスキの理論のもう一つの特徴は，それがある特定の場合にだけあてはまるのではなくて，あらゆる場合にあてはまる一般的構造を持っていることである．人間の意味論的困難は個人的なものであり，当事者以外は個々の場合を十分に把握することはむずかしい．しかし，コゼブスキの理論は，一般的方法を与えることによって，各人が自分で問題を解決することを可能にするのである．

IV

コゼブスキの理論についての諸家の批評の中で，バーランド二世についてはすでに述べたところで十分であってそれ以上つけ加えることは不必要と思われる．スチュワート・チエイス (Stuart Chase, 1888—) ——経済学者で意味論にも興味を抱き，多くの論文の外に，「言葉の暴虐」(*The Tyranny of Words*)，「一致に至る道」(*Roads to Agreement*)，「言葉の力」(*Power of Words*) 等によって，一般意味論をわかり易く紹介した——は，「言葉の暴虐」において，「科学と正気」の読みにくい原因は「コゼブスキがこの研究を『時間結合』という彼の初期の概念とからませたからである．もし彼が時間結合の概念を忘れてしまい，新たに出発していたならば，一層よかったであろう」と主張している．「科学と正気」が読みにくいことは事実であるが，その原因は，チエイスの主張するように，時間結合の概念のためではなくて，コゼブスキの表現のまずさによるものである．チエイスは「人間の成年」から「科学と正気」に至るコゼブスキの理論の発展を見落している．すでに見たように，コゼブスキの抽象作用の理論は，時間結合の概念から必然的に発

展していったのであり，「科学と正気」の中核は，結局，時間結合の概念を抽象作用の理論によって裏ずけたものなのである．

ハヤカワはコゼブスキの理論を忠実に継承している．ハヤカワの著作の中では，具体的にコゼブスキを批判した言葉は見出だされないが，「意味論，一般意味論，及び関連している諸学問」(“Semantics, General Semantics, and Related Disciplines”) と題する意味論の概観において，彼は次のように述べている．「コゼブスキの一般意味論に，どのような専門的な欠点があろうとも，それは言語，思考，行動に関する現存の知識を，使用出来るように綜合しようとして，20世紀前半になされた，最も有力な試みであった．」これはコゼブスキの理論に対する一般的評価という限界の中では，当っていると思われる．

ラポポートの見解ははじめに述べたところからも明らかであるが，「意味論とは何か」(“What is Semantics?”) という論文において，

The development of Korzybski's non-aristotelian postulates implies far more than relations between language and fact. His big point is that structure of our language affects the *functioning of our nervous systems*, and this is where his work departs radically from that of the “classical” semanticists. To say “the word is not the thing it signifies” is not just to indicate the obvious. It is to draw attention to a fundamental inadequacy of human behavior and to trace this inadequacy to the interaction of nervous systems with language. (Rapoport, Anatol. “What is Semantics?” in S. I. Hayakawa, (ed.), *Language, Meaning and Maturity*, p. 12)

と述べている．コゼブスキの理論の特色を簡潔に表現したものと言えよう．

V

コゼブスキは一般意味論を経験科学 (empirical science) と命名した．なるほど彼の理論には，単なる意味の理論よりはるかに多くのものがある．言語が抽象作用の各段階と構造的に一致しなければならないこと，人間の正気とはとりもなおさず抽象作用を意識することであることを主張したのは，コゼブスキの独創的なところである．彼は，要するに，人間の神経系統の抽象作用に基づく評価の理論を作りあ

げたのである.

しかしながら，コゼブスキが実際に創造したものを冷静に調べてみると，それを彼のように経験科学と名づけることは出来ない．経験科学であるためには，理論がただ単に観察や実験に基づいているだけではなくて，実証的な体系を持たねばならないからである．「科学と正気」を熟読すれば，コゼブスキが広範囲にわたる観察をし，莫大な量にのぼる読書をしたことはよくわかる．しかし，広範囲の観察と多量の読書が経験科学を産み出すとは限らないのである．勿論，このことはコゼブスキの仕事の重要性を減じるものではない．現在最も活躍しているハヤカワにしてもラポポートにしても，コゼブスキの理論の応用という点ではそれぞれ新らしい面を切り開いているとはいえ，理論自体においては，まだコゼブスキを一歩も抽んでてはいないのである．一般意味論の学派 (School of General Semantics) に属する他の人たち——例えばウエンデル・ジョンソン (Wendell Johnson, 1906–1965, 心理学)，アーヴィング・リー (Irving J. Lee, 1909–1955, 演説)，スチュワート・チエイス等——の業績も，同様に，コゼブスキの理論の枠内で行われたものなのである.

コゼブスキが経験科学を確立したと言えないとしたら，彼は何をしたのであろうか．彼は経験科学を確立する方法を示したのである．彼は知的革命の偉大な先駆者だったのである.